

現在、優良品種への更新や老木樹の更新など、改植が計画的に進められていると思います。永年性作物であるカンキツは、改植後一定の収量が得られるまでに数年かかり、この間は未収益となります。経営の安定を図るためには早期に樹冠を拡大し、一年でも早く成園化することが必要です。早期成園化のためには、大苗移植や植え付け時の土壌改良、植え付け後の管理等を適切に行うことが大切です。管理の不徹底により成園化が遅れないよう、しっかりと管理を実施しましょう。ここでは定植後二年目以降の管理について述べたいと思います。

一、幼木樹の枝梢管理

○主枝候補枝の誘引・剪定

定植後一年を経過した苗木は、新梢が発生し、枝も伸長していると思います。大苗を移植された場合はすでに主枝候補を選定し誘引されていると思いますが、一、二年生の苗木を定植されている場合はまだなされていない園地もあると思います。主枝はできるだけ早く伸ばす必要がありますので、充実した伸びの良い主枝候補の枝を三〜四本選び、支柱を立て、先端ができるだけ立つように、しっかりと誘引してください。

○整枝・剪定

樹冠の拡大を早めるにはしっかりと新梢を確保することが大切です。樹勢が中庸な品種は剪定は切り返しせん定を主体に行います。主枝候補枝や亜主枝候補の先端は充実した位置で切り返し、強いしっかりと新梢を確保するとともに、競合する枝は間引きします。同じ部位から複数の新梢が発生している場合は生育が良い新梢を残して間引いてください。

一方、青島温州や大津四号などの樹勢が強い品種では、切り返しせん定は極力避け、間引きせん定と誘引を主体に樹造りを行います。主枝の先端でも同位置からでた弱い新梢を間引く程度にとどめます。

二、土壌管理

樹冠の拡大を早めるためには、樹体を支え、養水分の吸収を担う根の生育を促進することが大切です。植え付け時に堆肥や石灰などの土壌改良剤の施用などの土壌改良が実施されていると思いますが、苗木の生育が不良な要因としては、土壌のpHが酸性化している、土が硬く排水が悪いなど、土壌に起因する場合も見受けられます。また、近年は温暖化の影響もあり集中豪雨や干ばつなど気象が極端化している傾向にあり、土壌の乾湿の差が大きく、樹体生育への負担も増大しており、根痛みを起こす要因になっていると思われる。敷き藁や堆肥の施用、土壌pHの改善など、細根が生育しやすい環境づくりに努めてください。

また、土壌の過乾燥は苗木の生育にとって大敵です。水分不足は、枝梢や細根の発育が不良となり、樹冠の拡大が遅れる要因となります。梅雨明け後晴天が続くと、葉からの蒸散も多くなり、土壌の乾燥も早くなります。敷きわらなどの、土壌乾燥抑制対策を必ず実施するとともに、土壌乾燥が進んだ場合は、かん水を実施し、土壌水分を確保してください。

三、施肥管理

施肥量を第一表に幼木での施肥基準を記載しています。施肥量は基本的には一樹あたり

で示していますが、年数が経過し一〇aに換算した時の施肥量が慣行の施肥量を上回る場合は、慣行の施肥量に準じてください。施肥時期も慣行の施肥時期と同様に行いますが、樹体生育を見ながら葉色が淡い場合など肥料不足と思われる場合は、適宜追肥してください。用いる肥料は有機質肥料で構いませんが、肥効くん等の肥効調節型肥料を用いると省力化を図ることができます。黒ポリなどのマルチ被覆は降雨による肥料の流亡を抑えることができ、抑草にもなりますので、活用を考えてみましょう。

また、発生した新梢の充実を図るためには、窒素主体の葉面散布が有効ですので、定期的に行いましょう。防除時に尿素三〇〇倍を混用するなど、効率的に行ってください

四、除草の徹底

雑草は土壌流亡を防いだり、土壌の物理性を改善するなどの効果があり、草生栽培を實施されている園地も多いと思いますが、雑草が繁茂しすぎると樹体との養水分の奪いが起こり、樹体への養水分の吸収が阻害され、生育が遅れる要因となります。特に幼木ではまだ根の発達が不十分で、その影響が強く表れます。これから暑い時期を迎え、除草はきつい作業となりますが、抑草マルチをうまく活用するなど雑草対策はしっかりと行ってください。

五、病虫害防除

幼木の樹冠拡大を図るためには、新梢の充実を促進することが大切です。これから気温が高くなるにつれて、葉や枝を加害するアブラムシやミカンハモグリガ、アゲハなどの害虫が増加してきます。これらの被害が発生すると枝や葉の充実が悪くなります。近年は温暖化の影響もあり、以前よりも気温が高く推移し、害虫の発生も多い傾向です。こまめに園を観察し、被害に会う前に防除を徹底しましょう。

七、着果管理

果実が着果した場合、果実に養分をとられ、樹冠の拡大が遅くなります。カラタチ台の場合はある程度着葉数が確保できている場合は、少しずつ着果させても構いませんが、わい性台木であるヒリュウ台を用いた場合はカラタチ台に比べて着果開始後の樹冠の拡大が小さいため、着果させる前に、樹冠をできるだけ大きくする必要があります。樹冠がある程度拡大するまではジベレリンの散布や切り返しせん定をの実施など着花を減らす対策を行うとともに、着花が見られた場合は必ず摘らいついて枝梢の充実を図ってください。

八、防風対策

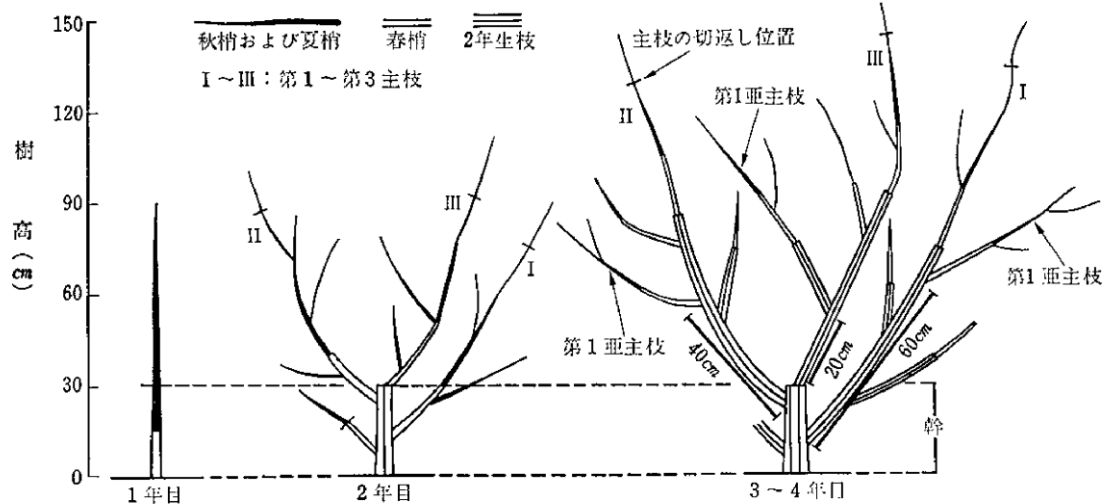
強風により樹体がぐらつくとも根の活着が悪くなり、生育が不良となります。樹の拡大に状況に応じて支柱の大きさも変えて、樹体がぐらつかないようにしてください。特にヒリュウ台は根域が浅く、強風により倒れやすいため、しっかりと固定しましょう。

.....

他に一般成木園の管理がある中で、幼木の管理は疎かになりがちですが、一年でも早く成園とするためには、日頃の管理が大切です。特に夏期の乾燥は大敵ですので、よく観察して適切な対応をお願いします。

「早期成園化のための幼木管理～カンキツ編～」

佐賀県果樹試験場 常緑果樹研究担当 専門研究員 夏秋道俊



第1図 温州ミカン開心自然形の仕立て方
それぞれ春の剪定前の樹形を示す (農業技術体系より抜粋)

表1 苗木・幼木の施肥基準

肥料成分	1年	3年	5年	7年	施肥量の配分
窒素	90	150	180	210	各樹種の施肥時期と配分に準ずる
リン酸	54	90	108	126	
カリ	54	90	108	126	